# ボート競技とマスタリーフォーサービス --ボートにスターは生まれない--

ボート部 北村良蔵 (昭和38年卒)

### 1. はじめに(自己紹介)

高等部から商学部へ、1963年卒。大学からボート部へ。

仕事の傍ら、ボート部借財返済に協力。監督、総監督も。2015 年度まで KGAA 副会長を務める。

- 2. 関西学院ボート部の歴史(米田満先生にボート部資料をいただきました)
  - (1) 明治27年(1894年)から30年にスタート。大学創立である明治22年に漕いだとの記録もある。みるめの浜(原田の森の近く)で全校をあげて応援。対戦相手は神戸高商であった。
  - (2) 吉岡院長、ベーツ部長、アウターブリッジ院長、西川中学部長含めて、学生全員がボート試合に参加応援した。全校を上げて寄附を募り、競争艇建造へ。神戸高商と熱い試合が続いた。
  - (3) 大正 3 年(1914 年)、神戸新聞大会にて優勝、学院応援隊 200 名。大正 4 年(1915 年) には、老朽化した 3 艇のために全校で募金運動が起こり、2,000 円(現在の価値で、220 万円相当) が集まる。

明治・大正時代のボート創生期に、何が教師、学生一体となり、活動へ打ち込ませたのか。大金を寄附して応援、参加する明治の人間のエネルギーはどこからくるのか。



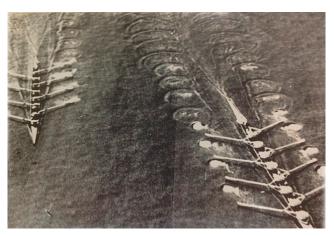
ボート部の優勝旗と共にベーツ院長(当時高等部長) 前列には運動部代表たち (写真提供:執筆者)

(4) 大正8年 (1919年) 突如、端艇部が廃止になる。原因は多額の出費に耐えられず、 その後、28年間休部。昭和22年 (1947年) に復活する。国立大学・琵琶湖・京 都勢に比べ、艇庫建設・維持、練習環境にハンディあるも、よく頑張っている。 1998年にはボート部復活50年、2008年には60年記念会を開催。スタートの 端艇部から118年(2012年当時)の歴史がある。

## 3. 世界・日本のボート史

(1) The Boat Race ザ・ボートレース。ケンブリッジ対オックスフォード 毎年4月対抗エイト漕艇大会 6.8 キロを漕ぐ。第1回は1829年(関学練習スタート1889年から遡ること 60年)。

ケンブリッジは昭和 29 年、オックスフォードは昭和 34 年に来日し、関学との対抗戦も行われている。



ケンブリッジとの対抗戦、左が関学 写真提供:執筆者

(2) オリンピックは第1回アテナ大会から正式種目である。競技には、小艇一人から 8人まである。代表的なものに、エイト(8人)、フォアー(4人)、スカル(1人)等。 基本2000メートル漕ぐ。大会は、インカレ、全日本選手権、アジア大会、オリンピッ クなどがある。日本では戸田ボートコースが中心、関西では琵琶湖、浜寺、加古 川などで大会が行われる。近年は、女子選手の活躍も目覚ましい(平成12年結成)。

## 4. ボート競技の特徴

- (1) コックスの存在。コックスの指示により、後ろを向いて漕ぐ。ひたすら漕ぐのみ。 誰もができる。しかしながら、継続するには強い意志と忍耐、日々の練習が大切。 艇を走らせるときは、スピードに乗った躍動感、耳元を過ぎる風。何より、クルー メンバーとの一体感、充実感が大きい。その背景には、長い合宿生活がある。
- (2)「ボート競技に教育の原点見たり」社会心理学者 辻村 明氏 「ボートにはスターが生まれない。父親からボート部に入ることを強く奨められ た」作家 安倍譲二
- (3) ボートにスターは生まれない。確かにボートからはスターが生まれてこない。それは団体競技だからではない(サッカーや野球にスターはつきもの)。なぜ、ボー

トからはスターが生まれないのだろうか。

第一に自然を舞台にして行われるものでスタンドプレーとは無縁だから、第二に選手のポジションの役割がボートではあまり大きな差がなく(もちろん微妙な差や役割はあるが)、外から見て、全体が揃っているかどうかだけがわかるもので個々人の動作は分からないから、第三に艇全体のスピードは個々人のスピードの累積や合計で出てくるものではなく、最も遅い者のスピードに全体のスピードが落ちてしまう、しかし誰が遅いか、手抜きをしているか否かは本人が良心に問う問題であって、外から見てもわからない・・要するにボートにおいては、目に見えない水中でのオール捌きが勝敗を決定するものであるから、「スタンドプレー」や「スター」とは無縁のものとなり、すがすがしいスポーツとなっているのである。

(4) 学生時代に忍耐と精神を鍛練しておくことは肝要である。

"Nobles Oblige" ノーブレス・オブリジ。身分の高いものは剛勇・高潔といった得を備えるべし。まさにボートはそれを共に求めていくスポーツである。

#### 5. ベーツ院長とボート

Mastery for Service を遺したベーツ院長は大正 4 年(1915 年)進水式に立ち会い。 教授、学生らの寄附で建設。対抗レースに、商学部、外国人教授と中学部先生達 も参加した時代。

大正6年(1917年)大学・合宿・多額の借財。

大正9年(1919年)廃止、端艇部負債、学院・宣教師が決断する。

## 6. スポーツとしてのボートの現状

(1) カレッジスポーツとしてヨーロッパでは盛ん。いかにボートで 2000 メートルを早く漕げるか。

他のスポーツで力を発揮できなかった人が、トップレベルで活躍できることも多い。大学から始められる。また、唯一国立大学が活躍できる。

(2) 自然の中で水面を疾走するスピード感、爽快感、究極のチームワークを追求できる競技である。

#### 7. ボートに貢献した先輩

- ・川端喜佐男 昭和22年ボート部復活に尽力される。ランバス125寄贈。
- ・中村勇司 兵庫県ボート協会を支援。神戸漕艇協会設立。
- ・池田無事郎 ベーツ胸像寄贈。インド井戸掘り。学院中学部に寄附貢献。
- ・上坂凱男 キャプテンとしてインカレ3位達成、トヨタ(渉外)副社長に。 その他多数。

#### 8. 学生への期待(まとめに代えて)

・寄附講座について

- (1) 大学とスポーツのあり方を、OB と学生との接点から、体育会長中心に KGAA 会長も協力。日本で珍しい寄附講座が発足しました。
- (2) 学生に向かって、どの様に話せば理解してもらえるだろうか、43 部、順次継続できるだろうか、大学教育の一端を担い、学院発展に寄与出来るだろうか。初めての体験、スタートするまで大いに悩みました。
- (3) 2012 年秋、体育会の先生方、体育会同窓倶楽部 (KGAA) 皆さんと、爽やかな秋晴れ、早朝の関学キヤンパスの美しさに感動しながら、教室へ! いよいよスタート緊張します!! 体育会本部の学生や、「関学スポーツ」の理解があって、2016 年秋から年末まで、連続4年間かけて完了します。素晴らしいことです。
- (4) 新しい授業スタイルを企画し学院、学生、KGAAの理解を得ながら、徐々に学生達に受け入れられ、初めての寄附講座が継続することになったと思います。特にKGAA幹事長の先生方との会話と、密度の濃い打ち合わせが、継続のパワーになったと思います。

#### ・KGAA と寄附講座

- (1) KGAA 事業の中で学院、同窓、学生の理解が深まったこと、40 年も継続している 関西大学との総合関関戦に6年前の2011年に逆転できたのも、KG全体の結束力 の結果ではないでしょうか。
- (2) また総会時に配られる KGAA 会報は、学長、同窓会長、体育会会長、学院と KGAA の考え方、方針、理解が出来る唯一の有意義な紙面に育ってきたと思います。
- (3) 各運動部対抗ゴルフ大会は50回を迎えました、千刈CCの伝統、日本で唯一の大学専属ゴルフ場です。ベーツ4代院長の胸像、台座修復時(2011年11月3日)、 KGAAゴルフ参加者196名全員から寄附を頂き完成しました。現在、ベーツチャペルの前に胸像があります。

## ・学生のみなさんへ

学生のみなさん、就職されるみなさんへ、文武 両道を目指し母校の栄誉のため、頑張ってくれま した。これからが真のスタートです。学院で出来 た友人、先輩との交流、後輩への指導、恵まれた 環境の中で、育てられたこと、振り返って感謝し てください。社会人になってからも、学院やクラ ブとの繋がりを継続して貰いたいと願っておりま す。

米田先生が話された、NOBLE STUBBORNNESS をたえず胸のなかに!



(写真提供:執筆者)

ベーツ4代院長からの Mastery for Service の精神のもと、文武両道プラス粘り強い品性! 奉仕の心! 願っています。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)